

吉備温故

二十

和書門			
二九二七二	函	架	冊
六九	冊		

和書	
二九二七二	冊
七五	函
一九	架

内閣文庫	
番號	和 29272
冊數	69 (14)
函號	175 182

内一〇七七三號



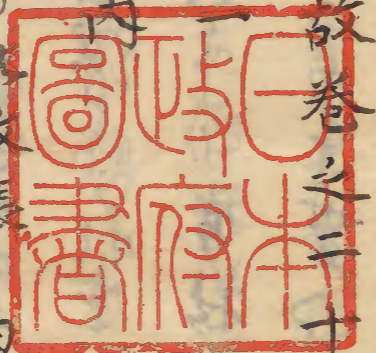
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

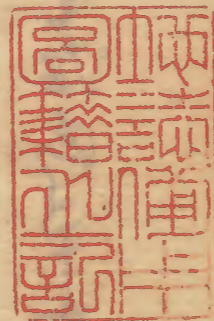


© Kodak, 2007 TM: Kodak





丙一〇七七三號



大澤惟貞輯録

寛文の改帳曰延喜式所載備前國神社大一座小

二十五座社教二十一社今現所存十六社既不存者五社也

然其或ハ傳記有或ハ傳記有或ハ傳記有或ハ傳記有

其社地ハ他の神と移り又他の社地ハ移り又

其社地ハ他の神と移り又他の社地ハ移り又

其社地ハ他の神と移り又他の社地ハ移り又

佛法盡ニ行ハテ王道既ニ衰ハテ神道ハ漸ク廢ル

水に依り佛氏降、亦して天道に説き傳ふる本地、
佛よりして垂跡、神也大權、塵と曰ふ故に權現
と名付縁と結ひ物を利とせよ、菩薩と云ふ或ハ
神社と寺院の鑑奇と稱し、其し起るもの、社名
とし改め何ハ幅大菩薩あり、号せし類も何り社家
と云其言と信し、其部名と説きたてし神佛と
混雜し、疑い、ある所、我先君

芳烈公深くこれと嘆し、其の宮社と唯一神道は後し
社人とし、宮社と①し、の浮屠氏とし、神事を
②し、の其世に、其神の業あり、と云ふ、むこれ

此國の家の大幸也、其神社に於ける式内二十社、其
祭神の傳記と正史に依りて記しぬ、又備中國式内
神七岡山鎮に有る宮社記しぬ、式外の神社も社家
注進し、神名知進たるハ其傳を記し、又當國神社の
内にて正史に載たるハ邑久郡安仁神社あり、今現に存
する神社所見あり、三代實錄に貞觀七年七月十九日
備前國正六位上見上神、真賀山神等、並に從五位下
と進む、何り此連とも存見上神、真賀山神ともは
在所知れず、其式内二十社の内、その名の書りたる
あり、そのいふ説、何れとも延喜式も其時代、余り

安仁神社名神

赤坂郡六座小並

鴨神カモ神三座

宗形神社ムネカタ

石上布都之魂神社イソカミフツノミタマ

大布勢神社オホフセ

和氣郡一座小

神根神社カネ

上道郡四座小並

大神オホカミ々社

御野郡八座小並

石門別神社イシド

尾針神社オビハリ

天神社テノカミ

伊勢神社イセ

天計神社アメハカリ

安仁神國神社アニ

石門別神社イシド

尾治針名真若比女神社オビヂハリナマシワヒ

津高郡二座小並

新島鴨神社

宗形神社

兒島郡二座

鴨神社

田土浦坐神社

私に案りよ此二十一社より毎年祈年

祭りと國司の長官に奉り會々祭り

己へたり祈年の祭り申祀何り祭

りの幣たよ記

四時祭曰凡祈年祭二月四日祈年祭神三千一百

三十二座神祇官祭神七百三十七座

國司祭祈年神二千三百九十五座

大一百八十八座座別絲二兩綿三兩

小二千二百七座座別絲二兩綿二兩

右國司長官以下准例散齋三日致齋一日共會

祭之其幣皆用正稅

安仁神社ハ各神の内互ハ臨時ト有ト凡へたりたよ記

臨時祭式曰凡常之外應祭者隨事祭之非雜官處

分不得輒預常祭

各神祭二百八十五座

安仁神社一座國備前

座別アヒキヌ絶アヒキヌ五尺綿一屯絲一絢五色薄絶各一尺木綿

二西麻五兩裹料薦廿枚着有大禱者加絶五丈五

女尺以布一端代絲一絢

倫中國十八座大一座小十七座

窪屋郡三座並

大百射山神社

足高神社

菅生神社

加夜郡四座大一座小三座

古郡神社

野俣神社

鼓神社

吉備津彦神社各名神

下道郡五座並

石疊神社

神神社

麻佐岐神社

横田神社

穴門山神社

小田郡三座並

在田神社

神嶋神社

鷄江神社

後月郡一座

足次山神社

英賀郡二座並

比賣坂鐘乳穴神社

井戸鐘乳穴神社

邑久郡

美和神社 磯上村

式内神あり多ありとの神一座大己貴多あり大和國
城上郡三輪社と曰く

日本紀一書曰大己貴命與言曰夫葦原中國本自

荒芒至及盤石草木咸能強暴然吾已摧伏莫不和

順遂因言今理此國唯吾一身而已其可與吾共理

天下者蓋有之乎于時神光照海忽然有浮来者曰

如吾不在者汝何能平此國乎由吾在故汝得建其

大造之績矣是時大己貴神尚曰然則汝是誰邪對

心然下四事紀在
頭出波浪永為素
家夫持天籙槍
四字

曰、吾是汝之幸魂、奇魂也。大己貴神曰：唯然、通知汝是吾之幸魂、奇魂。今欲何處住？耶對曰：吾欲住日本國之三諸山。故即宮宮彼處、便就而居。此大三輪神也。此神之子、即甘茂君等。大三輪君等又姬、踏輪五十鈴姬命云云。

已上旧事紀大畧回

旧事紀曰：大己貴神乘天羽車、大驚而覓妻。下行於茅渟縣、娶大阿祇女子、活玉姬為妻。往來之特人、非所知而密往來之間、女為姪身之時、父母疑、恠問曰：誰人、未耶？女子答曰：神人狀、來自屋上、零入、未坐、共

覆卧耳。尔時、父母忽欲察、顯續麻作線、以針鈎係神人、短裳而明且隨、絲尋覓、越自鈴穴、經茅渟山、入吉野山、留三諸山、當知大神、則見其絲、遺只有三繫號三輪山、謂大三輪神社矣。

日本紀崇神紀曰：天皇姑倭迹迹日百襲姬命、為大物主神之妻。然其神常、盡不見者、分明不得視其尊顏。願暫留之、明且仰、欲觀美麗之威儀。大神對曰：言理灼然、吾明且入汝櫛笥、而居。願無驚吾形、爰倭迹迹姬命、心裏密異之、待明以見。櫛笥、遂有美麗小蛇、其長太如衣、細則驚之、叫啼時、大神有耻、忽化人形。

謂其妻曰、汝不忍令羞吾、吾還令羞汝、仍踐大虛登
于御諸山、爰傳迹、迹姬命仰見而悔之、急居云、急居此
于則著撞陰而薨、乃葬於大布、故時人号其墓謂箸
墓也、是墓者日也、人作夜也、神作故、運大坂山石而
造、則自山至于墓、人民相踵、以手運傳而運、時人
歌曰、飲明佐介、珥莞藝、迺煩側屢、伊辭務、邏塢多誤
辭、珥固佐、瘵固辭、介氏務、介茂

片山日子神社

式内の神あり多る所の神一應、天日方奇日方命と云
旧軍紀曰、素戔嗚尊孫都味齒八重事代主神化為
八尋熊罴通三島溝杭女活玉依姬、生一男一女兒
天日方奇日方命此命、檀原朝御世勅為食國政申
大夫供奉、妹姬踏鞞五十鈴姬命此命、檀原朝立為
皇后誕生二兒、即神渟名河耳天皇次彥八井耳命
是也、次妹五十鈴依姬命此命、葛城高丘朝立為皇
后誕生一兒、即磯城津彥玉手看天皇也、天日方奇
日方命亦名阿都命此命娶日向賀牟度美良姬生

梅より一と
ニと一と
下父
ニかある

一男一女兒健飯勝命味津中底命安寧皇后
又曰天日方奇日方命拜為申食國政大夫其申食
國政大夫者今之大連亦云大臣也但天日方奇日
方命者皇后之兄大神君祖也
日本紀崇神紀曰問大田田根子曰汝其誰子對曰
父曰大物主大神母曰活玉依媛陶津耳之女亦云
奇日方天日方武茅津祗之女也
旧事紀日本紀天奇の字上下の遠ひ何り曰人紀
一説山城の國高野郡松尾曰神々何り松尾は所祭の
神二座也大山咋神市杵島姬命按る者村子

松尾神社何り之水と混りていふ所なり書

安仁神社

式内の神有り上古天皇在り宮あり此有神体未分明或曰
大納言三位右近衛大将安隆朝臣安人靈祀
仁明紀曰永和八年備前國邑久郡安仁神社預名
神尊
延喜式神名帳曰邑久郡安仁神社名神
富山翁考曰三議後三位秋篠安仁郷と兼神あり也
安仁郷名後從四位下ノ久弘仁三年三月備前守任之
此
同六年三月ノ久弘仁時奉議文屋綿磨備前守任之

これより九年六月御曆中納言に任されし時
安仁郷を議從三位に再備前を任されて同十二年
二月御安仁郷任中に薨されし地郷に徳ありし人
よて此國の民慕ひし故に再任せしむる故に薨後
其徳を尊むる所を安仁神社とありの祭りありし
弘仁十二年に薨されしに於て亦一年を経て承和八年
に各神を禰と國史に見し其年序異なりし如し
又或説地主の神として上古より神徳ありしと承和
八年禰各神とあり
私按りて安仁郷を祭りしに於ていふに連なりしに福あり

又薨後ややく二十ヶ年して各神を禰と事いし
國民其徳を慕ひて本社と建て神を祭りしに於て
これに朝廷をんは是を各神とせんや當國より上古
より天神地祇を二教社たりしに於て其内より禰各神は
唯此安仁神社のみこれに其時代も當國その大社にて何ん
これに地主の神と云ふに於て何んか當社に古に年禰の祭
り臨時の祭りも有しと凡て延喜式に於たりしに於て
四時祭曰祈年の祭に二月四日也式内の神と國司是を
祭り其内當社の各神これに幣も練二兩あり其
幣に正税と用むるにあり又各神祭りに絶カニヤ五尺練一約

綿一疋五色の薄絶各一尺木綿二兩麻五兩粟科の
薦十枚多有大禱者絶五丈五尺とかぶ布一端といふ糸
一約三代り

一説曰阿田賀田須命といふ此命と旧事記より考ふる
素戔嗚尊の八世の孫也築前國胸肩神社の田心姫命
市杵島姫命湍津姫命の三前の神の糸りとすゝ糸像
君の祖也姓氏録曰宗形朝臣大神朝臣同祖吾田片
陽命之後也といひ

和論語曰安仁大明神神託 倫前國

益人々直き心の徳をあらわす徳あえつちとす

神明と友とあるものもまた心と外とあり
根の國に入落へ

考ふる當社と中古ハニ宮といひや當國片岡村の民衆
は所藏より貞治元年信景在判佛神領名帖の内ハ二下
當國二宮津山といひ當國一宮ハ津高郡二宮ハこの安
仁神社あり橋本作かき一宮二宮あり他國此例多し
橋本一宮ハ完栗郡伊和社あり糸神大己貴命津毫二宮ハ
多阿郡荒田社あり糸神少彦名命作か一宮ハ若東郡
中山社あり糸神大己貴命二宮ハ津山の西半里餘りあり
糸神傳記考と諸社一覽ハ見たり

私又曰當社毎春 淨田姓人より 淨代冬何う云
古く國守自祈年の祭の連風ありん

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 鴨神社 and 仁堀西村）

赤坂郡 仁堀西村

鴨神社 式内神あり

京都加茂神主松下三位社務と勤めし

勅勤し後寺社奉行當社に初官とあり

今も毎歲加茂

と社人あり當村に高百五十名加茂

所あり神別雷命といふ

神名帳に赤坂郡鴨神社三座といふ

加茂上切敷と一所あり

縁起云在山城國愛宕郡下社御祖二座健津之身

命丹波伊香古姬也上社一座別雷命是御祖之御孫也下

姓氏錄曰賀茂縣主神魂命孫武津之身命之後也神日本磐余彥天皇欲向中洲之時鴨建津之身命化如大鳥翔飛奉導遂達中洲天皇嘉其有功特厚褒賞八咫鳥之号從此始也

日本紀曰皇師欲趣中洲而山中峻絕無復可行之路乃搏遑不知其所跋蹠時夜夢天照大神訓于天皇曰朕今遣頭八咫鳥ミヤコヒト以為卿導者果有頭八咫鳥自空翔降天皇曰此鳥之来自叶祥夢大哉赫矣サカサハルカサ

我皇祖天照大神欲以助成基業于是時大伴氏之遠祖日臣命帥オホ大來目督將オホツツミ充戎踏ツツミ山啓行乃尋鳥所向仰視而追之遂達于菟田下縣因号其所至之處曰菟田穿邑中二年春二月定功行賞中又頭八咫鳥亦入賞例其苗裔即葛野主殿縣主都是也諸社一覽曰丹波國神野社祭神一座伊賀子夜姬命神名帳註曰賀茂建角命婦伊賀古弥日賣命也玉依彥玉依姬母也玉依姬鴨御祖也玉依彥可茂懸主等遠祖也

又下賀茂八玉依姬大己貴命と多ふといふ

神社考曰公事根源云下賀茂御祖上賀茂別雷
御祖神者号玉依姬賀茂建角身命之女也或時道
遙于瀨見小河邊有丹塗矢自河上流下玉依姬採
矢夾屋上頃之有身遂生男子不知其父為誰也一
日謀聚里人設宴授盃于男子曰此盃可于汝父時
兒擲盃于虚空踏破家屋曰我是天神之子也飛而
上天是即別雷神也其丹塗矢者今松尾大明神是
也
神書抄云丹塗矢者大己貴之所化也
神代卷曰大國主神亦名大物主神亦号國作大己

貴命亦曰葦原醜男亦曰八千戈神亦曰大國主神
亦曰顯國玉神云云夫大己貴命于少彥名神戮力
一心經營天下復為顯見蒼生及畜產則定其療病
之方又為攘鳥獸昆虫災害則定其禁厭之法是以
百姓至今咸蒙恩賴
崇神紀曰問大田田根子曰汝其誰子對曰父曰大
物主大神母曰活玉依媛陶津耳之女亦云奇日方
天日方武茅渟祇之女也

梅子建角身命陶津耳武茅渟祇曰人前說緣起八涉祖
依媛玉依姬又曰人前說緣起八涉祖

宗と祖又と云へ健津之身命丹波伊香古姫の二座と
志たらしめし後説ハ神書抄崇神紀等より依て大己
命玉依姫の二座と云ふなりし後説と相たり
とせしり
神社啓蒙曰或問賀茂為別雷神所謂八色雷公是
也且旧書所載鴨箭為雷之説其言掲焉何為不記
焉答曰以賀茂為雷公神非吾所聞後世好事者為
此也所傳賀茂神詠曰千早振別雷山ワケツキ仁住宮ニヤキ之臣
天降事神代カミ年利先別雷者賀茂山名也雷年土同訓都地故字或作土
是以為別雷神耶為之別雷山神可也為之雷公神

否也今松尾有称別土者不知何故也

宗形神社

式内神也

所祭之神と吾田片隅命と

社司に説是里村に氏神と宗形神社と又山形八幡と

中より按るに宗形神社と山形八幡と一なり謂れり

金川城主松田氏佛法信仰甚上秘世に社記系録失神名

元不有自諸方の神とハ幡宮と稱したる多し是も佛家よ
神佛と混々ハ幡大菩薩といひしは依て佛法信心の者
有ハハ幡(帰會)多し名多し故に何ハ幡と稱せしむる
又吾田片陽命と云ふは、いふに不審なり片陽命曰事
紀曰素戔嗚尊ハ世孫阿田賀田須命和迺君等祖
姓氏録曰宗形朝臣大神朝臣同祖吾田片陽命之後也
日本紀曰田心姫湍津姫市杵嶋姫此三女神悉是爾兒兒
便授之素戔嗚尊此則築紫胸肩君等所祭神是也
又宗形の三女神と云ふは、いふに不審三女神の事ハ下
記中會見のへ

石上布都之魂神社

神名帳式内神也

神代卷一書曰素戔嗚尊キリシヨロヤ断蛇之劍ツルキハ今在吉備神部カン許也トコロニ

同一書曰其断蛇劍オシケラ號曰蛇之麿アラ正此マコト今在石上也

新抄云云と集云一説在吉備神部所石上ト見たり是も、今本文の石上と備前と見たるあり

旧事紀曰其断蛇之劍今则在吉備神部許又曰断蛇之劍号曰蛇之麿正今在石上神宮也

是既書云神名帳と引て備前國赤坂郡石上布都之魂神社といひ是を以て考ふれば本文石上ハ當國也

神社啓蒙曰 石上神社 在備前國赤坂郡國山傍
布都御魂 當宮素盞鳥尊斬蛇之劍号韓鋤也祭
以為神靈神紀所謂其素盞鳥尊斬蛇之劍今在吉
備神部許又云其斷蛇劍号曰蛇之麁正此在石上
者是也因功則名麁正據形則号韓鋤所謂異名同
物崇神天皇御宇奉遷大和國山邊郡
旧事紀天孫本紀曰伊香色雄命磯城瑞籬宮御宇
天皇神御世詔大臣為班神物定天社國社以物部
八十手所作祭神之物祭八十萬群神之時遷建布
都大神社於大和國山邊郡石上邑則天祖授饒速

日尊自天受耒天璽瑞宝同共藏衛号曰石上大神
為國家亦為氏神崇祠為鎮
又曰神劍飾靈劍刀亦名布都主神魂刀亦云佐士
布都亦云建布都亦云豐布都神是也
古語拾遺曰天十握劍其名天羽羽斬今在石上神
宮古語大蛇謂之羽羽言斬蛇也
同言餘抄曰十握劍者劍長十握也疏謂柄長十握
者非也其名曰蛇之麁正亦名蛇韓鋤亦名天蠅斫
亦名天羽羽斬其劍在石上神宮或在吉備神部許
神名帳大和國山邊郡石上坐布都御魂神社又備

前國赤坂郡石上布都魂神社西國石上神靈亦同
所以有異說也新作劔一千口藏于石上神宮者在
于垂仁紀

新と曰はれ書と以て考るるより上古素戔嗚尊此と劔の
劔ハ當社に在り明く其後崇神天皇の御宇大和國
山邊郡石上村に移し置と云れ此處社と廢せしむるに
又延喜式神名帳にも大和國と當國と西國と布都魂神
社載されたるハ當國石上神社と大和國勸誘して地名も
石上といふなり此ハ當國の石上布都魂と云ふ多岐あり
又垂仁天皇御宇新劔一千口と作りて石上神宮に藏む

布と云れハ此と劔の劔を當國に傳ふる多岐ありされは世多あり
時移りて佛法生ずるは此神を弟に妻へ石上賜り此
の事を知る人なくあり此ハ

大守菅原公深く是を考り延喜元癸丑年唐澤
元胤に命じて社記を作し其時奉納し大和山村
に内之地名二十石を神領とし祠宮金谷肥後を田獵物部
領し其後其時月の禮奠ありたり又其後
寛永七年崇寧寺社奉納し門田市島尾貴通此を
村瀬島九郎俊重に命じて宮殿を再造有りしと云ふ社
記ハ繁榮寺社記ハ云ふ記あり其卷を有り

補當社ソツ以シ當ト時ト言フ宗ノ大ノ杉ノ山ノ高ノ福ノ寺ノ鎮
守ト田ノ事トありシ次ニ才大破及以實文ノ比ノ佐野
善内命ト言フ旧社と修理シタリカキ記法ハカサリ乃有リタリ
室承ノ再造ト有リカキ實文ノ比有リ初官有リ
之レト同ク大杉山ハ社事ト知ル也

布勢神社

式内ノ神あり多ク所ノ神一座布勢カ氏ノ祖トシテ若野毛ニ股王有リ
日本書紀曰應神天皇妃河泚仲彦弟媛生稚野
毛ニ泚皇子
古事紀曰又娶咋股長日子之女息長真若中比賣生御子若沼毛ニ股王
又曰若野毛ニ股王娶其母弟百師木伊呂辨亦名
弟日賣真若比賣命生子大郎子亦名意富富杼王
次忍坂之大中津比賣命次田井之中比比賣次田

補當社ソツモ此等當時言宗大杉山高福寺の鑑
守回事あり一々次第大破及ひ實文の比は佐野
善内命と崇り旧社と修理此社社ありハ
室承より再送仰りあり女賣文の比より初官より
これと仰り大杉山ハ社事と知り

布勢神社

式内の神あり多る所の神一座布勢氏の祖と云若野毛
二股王

日本書紀曰應神天皇妃河泚仲彦女弟媛生稚野
毛二泚皇子

古事紀曰又娶咋股長日子之女息長真若中比賣
生御子若沼毛二股王

又曰若野毛二股王娶其母弟百師木伊呂辨亦名
弟日賣真若比賣命生子大郎子亦名意富富杼王

次忍坂之大中津比賣命次田井之中比比賣次田

宮之中比賣次藤原之琴節イラツソ即女次取トリ上賣王次沙サ
称王子故ホ意ホ富々ホ杼王ト者三國三君三波三多三君三息ホ長ホ坂ホ君ホ
之勢等祖也

是を以て按ずる布勢氏の祖神と何れは否乎

古二股王子意富々杼王の二王の内ありんり

旧事紀曰推沼笥二股王皇子命等祖三國三君三

同書國造本紀曰竺志末多國造志賀高穴穗朝息ヲキ

長公ナカノキミ同祖稚沼毛二股命孫都紀ツ加カ定チヨウ賜國造

又一説布勢氏の祖大彦命と何れは日牟紀ニ考あり

孝元天皇七年春二月丙寅朔丁卯立ウツ鬱シ色シ謹ム命ヲ皇

后后生二男一女第一曰大彦命第二曰稚開化日本根子彦

大日日天皇第曰倭迹迹姬命兄大彦命是阿部臣

瞻臣阿閉臣狹狹城山君筑紫國造越國造伊賀臣

凡七族之始祖也と何りて布勢氏の祖といふあり

前説若野毛二股王を布勢の祖といふ是あり

和氣郡 神根村 式内神也所祭之神一座神根本村の氏神ハ幡宮と
柳殿と多々といふ

和氣郡

神根神社 神根村

式内神也所祭之神一座神根本村の氏神ハ幡宮と

柳殿と多々といふ

鐸石別命と多々といふ姓氏錄曰和氣朝臣垂仁天

皇皇子鐸石別命之後也神功皇后征伐新羅凱旋

明年車駕還都于時忍熊別皇子等竊搆逆謀於明

石界備兵待之皇后鑑識遣弟彥王於針間吉倫界

造關防之所謂和氣関是也太平後錄從駕勲酬以

封地仍被吉備磐梨縣始家之焉光仁天皇宝龜五

日本紀 ステシ スリテイワ
垂仁紀曰妃淳葉
曰瓊八媛生銀
石別命
妃ハ丹波の道主
王ハ如命 銀石別
ハ和壇の弟多

年改賜和氣朝臣姓也日本後紀曰桓武天皇延曆
十八年二月乙未正三位民部卿造宮大夫和氣朝
臣清磨薨本姓磐梨別公後改藤野
此二書と以て考ふるに神代皇后攝政二年より桓武天
皇延曆十年まで八年教五百八十九年あり此る何代の書
西より右位や法麻呂の後と和氣郡に居住せしとんたり
さすれば先祖鐸石別命とありしとん其縁あり
一説に開化天皇皇子大根王あり日本紀曰事紀等
開化の御子の中より大根王と云ふ
古事紀曰若倭根日子日子大毗毗命又娶丸迹臣

之祖日子國意都命之妹意都都比賣命生御子
日子坐王又娶近淡海之御上祝以
伊都玖天之御影神之女息長水依比賣生次神
大根王亦名八爪入日子王神大根王者三野國
之本巢國造長緒部連之祖

此を以て考れハ神大根王ハ開化天皇の御孫あり神
大根の太の字と申雲々神根神社といふものありん
村名も亦是より布つくり

或説に云垂仁天皇皇子大中津日子命とあり是ハ古事
記に大中は日子命ハ吉備の石无の別祖也とありし

依りしありし日本紀曰事紀より大中華日子命ハ凡中
大中華命とありあり日子姫の遠心ありし日本紀曰事
紀の方よりありし

日本紀曰景行開美濃國造名神骨之女兄遠子弟
遠子竝有國色則遣大碓命使察其婦女之容姿時
大碓命使密歸而不復命由是恨大碓命

國造本紀三野前國造春日率川朝皇子彦坐王子
八瓜命定賜國造

上道郡
大神神社 四御神村
式内の社あり多あり所の神四座

西布波能母遲久須奴神

東深淵之水夜禮花神

北游美豆奴神

南天之冬衣神

故事紀曰兄八島士奴美神娶大山津見神之女名
木花知流生子布波能母遲久須奴神此神娶游迦
美神之女名日阿比賣生子深淵之水夜禮花神此

出雲風土記云國
引坐意美豆挈
命

神娶天之都度開知泥上神生子淤美豆奴神此神
娶布怒豆怒神之女布帝耳神生子天之冬衣神此
神娶刺國大上神之女名刺國若比賣生子大國主神
亦名謂大穴牟遲神雄姓氏錄云素佐能

一説三輪回神と云神名帳四座と云此は四神
と云ふ事は是れ又當村と四座神と云ふ
此縁あり

社司の説は古く伊勢國鳥羽の鶴産今の社地との
五所もりの系は杉山といふ所は古くの社地なり其後
神女の事もつて今の地へ遷宮と申中此大災何

里て記録神寶等皆焼失す其社は杉尾御崎の社
何り大神遷座と云ふ此村と土沙村といふ也

又一説土田山は鶴産といふ
出雲風土記云國引坐意美豆努命

旧事紀曰素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安乎
乃遣五世孫天之葺根神上奉於天其後日本武尊

征東之時以其劍号曰草薙劍矣頭書冬衣
神名帳曰山城國相樂郡和伎坐天乃夫支賣神社

日本紀亦旧事紀同故不書

神皇正統記卷之九 御野郡 石門別神社 大安寺村今不存又一説三門村云々
式内之神也所多々神一産天石戸別命
古事紀曰天石戸別神亦名謂櫛石窓神亦名謂豊
石窓神此神者御門之神也
旧事紀曰令豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿
門天子也命
倭姫命世記曰御門神豊磐窓命櫛磐窓命
社司高山氏説云大安寺村に社あり神体ハ旧村に杖多坂
の裏社大明神の御殿に移り置けり云々

御野郡

石門別神社

大安寺村今不存又一説三門村云々

式内之神也所多々神一産天石戸別命

古事紀曰天石戸別神亦名謂櫛石窓神亦名謂豊

石窓神此神者御門之神也

旧事紀曰令豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿

門天子也命

倭姫命世記曰御門神豊磐窓命櫛磐窓命

社司高山氏説云大安寺村に社あり神体ハ旧村に杖多坂

の裏社大明神の御殿に移り置けり云々

一説は下伊福村枝三門村高御殿といふ所は古に鏡屋
 何りといふ 三門の祠宮の説は
大神社の説は古と云 此れと新に考ふるは古に
 此処は鏡屋といふが、其標有る似たり古に記さく
 は梯石窓神豊石窓神ハ御門ハ神あり上古ハ天子も
 至御門何りし故に帝を三かき訓し古也又當所の
 此所ハ神の御居たりし。依り地名を御門と
 号けしを後世三門ハ文字を改めしものと云くはり
 御門三門訓同。又高御殿の舊跡をんがは御門の
 神を祭りしものありん石築の海も両方ハ同くは
 何りて御門の海もいふべきあり然れども社司の
 説と相違ふれハ志ありハ是非と云く又三門の社地
 今未だ石神といふありまゝ水といふ石神の
 ありりハ記中故に云ふ可く

尾針神社

式内神也祭所の神一在岡山今の酒折宮社地ハ
此尾針神社ハ社あり一由酒折宮社記曰天正一初の
宇奈多直家築岡山城仍一酒折宮社是尾針
神社一在地一移あり
所祭神と屋綱根命と

旧事紀曰天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊十三世
孫尾綱根命此命譽田天皇御世為大臣供奉妹尾
綱真若刀婢命嫁五百城入彦命生品ホシ阨真若王次
妹金田屋野姬命嫁甥品阨真若王生三女王則高

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

城入姫命次仲姫命次房姫命此三命譽田天皇玆
為后妃誕生十三皇子中品太天皇御世賜尾治連
姓為大臣大連勅尾綱連曰汝自腹所產十三皇子
等汝率養日足奉耶時連為大歡喜之己子稚彦連
外妹毛良姫二人定壬生部
一説曰日本武尊を筑前と云ふ所と云ふ尾張國
熱田と當國同く勅法也依り其玉名を云り
尾針神と号けり其の事日本武尊を筑前と云ふ
所形劔之彦彦又尾張を上古ハ尾針或ハ尾治
字と書けりとの及んたり

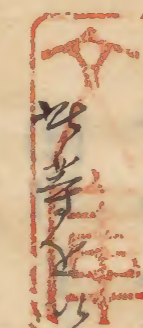
旧事紀曰尾治房彦連

大八洲記曰尾張國神代記曰草薙劔此今在尾

張國吾湯市村即熱田祝部所掌之神是也



一曰草薙劔大蛇之尾針也此劔鎮在于熱田社



故呼稱國名謂之尾針也
又考之古ハ大島といふ名所あり此大島ハ神と讀
んふ所の名何れ也尾針神社と讀たるありま本集
具氏 考りともと身のつき事ハ大島の神の心をたむ
まらるる

又酒折宮と天正初屋針の神社の言地、移るといふ是を
新に相うよ、此屋針神社上存を望大島に移居たりし、今の
同の地とて別酒折宮と名いふ、屋針神社の事、一とて
後世より酒折宮と神名のかきりたる、其體は、これとも
酒折宮と本社甲所、一とて、一又一説、熱田を勧請す
とも、今酒折宮の神殿を擇と考ふる、三社造り、一とて
西東の例、二前合て本社有り熱田の神殿、似たり、又社内
に本社と擇、一とて、一有り、一皆熱田本社或は
本社有り、是等と考、これ、熱田と勧請す、と、いふ是有り
お殿の神、此と、これ、熱田、一、所、糸の伊弉册、天照大神

素戔嗚尊宮、黃媛等、神あり、これ、神あり、是
非を、酒折宮、別、記、合、一、一、又一説、熱田
の奉殿、大宮と稱、第一、間、天照大神、第二、間、素戔嗚
鳥尊、第三、間、日本武尊、第四、間、宮、黃媛、等、
五、間、建、稻、種、命、
宮黃媛等の御足、在、張、此、熱田
神宮の祖神あり

天神社

式内神也所祭之神一座天神魂命といふ

旧事紀神代系紀曰七代天神玉命葛野鴨縣全等

祖

姓氏錄曰賀茂縣主神魂命孫武津之身命之後也

旧事紀天神本紀曰天照大神詔曰豊葦原之千秋

長之瑞穂國者吾御子正哉吾勝勝速日天押穂耳

尊可知之國言寄詔賜而天降之時中高皇產靈尊

勅曰若有葦原中國之敵拒神人而待戰者能為方

便誘欺防拒而令治乎令三十二人竝為防衛天降

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

供奉矣天^{カミ}神魂^{カミタマ}命^{ミコト}葛野鴨縣主等祖^{他命}

今所在不^レ存教^レ説有^レた^レ記^レ之^レ何^レれ^レ是^レ多^クと^レ志^スる^レ也
寛文年中改帳^ニ津島村^ニ枝^ニ福^ニ居^ニの天神社^ニ式内^ト
何^レ

奥内村天^ノ野神社^ニ式内^トといふ寛文年中改帳^ニ天^ノ野
神社^ニ多^ク所^ニ之^レ神^ト雅^ニ日^ノ女^ノ命^ト何^レ

正^ニ伊^ノ移^ノ村^ニ枝^ニ三^ノ門^ノ言^ノ郷^ノ殿^ト云^レ所^ニ之^レ社^ニ地^ニ有^レ之^レ由^レ赤^ノ宮
小^ノ幡^ノ言^ノ初^ノ官^ノ岸^ノ中^ノ之^レ説^也

天^ノ帳^ト

伊勢神社 小畑町^ニ在

社司の説^ニ曰^ク延喜式^ニ伊^ノ野^ノ郡^ニ伊^ノ勢^ノ神社^ト神^ノ名^ノ帳^ニ載^レ
られ^レハ^レ別^ノ當^ノ社^ノの^レ伊^ノ事^ト云^レ當^ノ地^ニ之^レ體^ニ在^レ之^レ豊^ノ受^ノ皇^ト
太^ノ神^ノ言^トと^レ奉^レ崇^レ敬^レ御^ノ社^ノ何^レの^レ當^ノ社^ノの^レ東^ニ之^レ當^ノつ^レて^レ濱^トとい^ふ
所^ノの^レ地^ニ當^ノ社^ノの^レ當^ノ地^ニ之^レ體^ニ在^レ之^レ神^ノの^レ御^ノ社^ノ有^レり^ハ御^ノ神^ト
躬^トと^レ當^ノ社^ノ之^レ遷^レ奉^レ皇^ノ御^ノ相^ノ殿^ト御^ノ社^ノ産^レ成^レ奉^レり^ハ當^ノ
社^ノの^レ社^ノ傳^也則^チ御^ノ神^ノ躬^ト御^ノ重^トと^レ内^ノ外^ノ宮^ノ御^ノ勸^レ誘^レ御^ノ事^ト
内^ノ外^ノ両^ノ宮^トと^レ祝^ヒ奉^リ故^ニ伊^ノ勢^ノ言^ノ神^ノ昭^トと^レ仰^奉り^ハ何^レ
ら^レ古^ハ古^ハ進^進と^レ伊^ノ勢^ノ言^トとい^ふ中^ノ後^ノ所^ニ在^ル也^ト成^リ
延喜元年の比^ニ云^レハ^レ伊^ノ勢^ノ言^ノ所^トとい^ふと^レ伊^ノ勢^ノ國^ニ小^ノ畑^ト

之を名づれハとして富永の地より高野と小畑町と改メトス
ハ濱ノ姫ヲ神ノ御鏡産何リトシテ此れと稱スルアリ
崇神天皇五十四年丁丑又吉備國各方濱言ノ迂ニ四年
ノうち齋奉ル時又吉備玉造采女吉備津比賣又地口
御田と進クと倭姫の世記見クハ此濱村アリ今御鏡
産跡トシハ隣村西河系村アリ古ハ濱と云リ此邊跡
ノ一ト後世河系村トアリタルアリ
皇古神言御鏡田本孫
ハ吉備玉名方濱言称
崎若の上の残水御鏡又迂リ生トスヘナリトシテ
ハ吉備玉名方濱言称
謂ハ崇神天皇六年マケハ天照太神の御神と天皇大殿
甲の由ニ繁アリタルハ古神鏡と畏ルヒ位ニシテアリ

故ニ此年ハ天照太神と豊鋤入姫命崇神帝ノ皇女也トテ倭國
笠縫邑ノ繁アリ終ハこれハ十九年ト經テ垂仁天皇二十
六年十月又今の伊勢言度會の宮又御鏡産何リト事
日本紀又スルナレハ其ハ十九年の后諸國ヲ移リ御鏡産有
ト所ハ畧トテ記シ終ハナリト也故事ハスルトハ倭姫
世記ト云ク注クハ崇神天皇六年九月天照太神及草薙
の劍と朝廷ト皇倭國笠縫邑ヲ移リ始アリ豊鋤入姫と
トテ齋奉リタル次ハ丹波玉吉作コトハミヤ宮次ハ倭國伊豆加志
本宮次ハ木の玉奈名依濱言ノ迂リタルハ四ヶ所の宮又凡
四十五年ト經テ回帝の五年四年丁丑又吉備國又迂リタル

右神宮内宮と有り同是野之宮右内宮の縁に在也
神躰内宮と初御事と有り是等と以て考れらるるの
事也と唱りて其意を考るる事あり
元禄室永以の社方帳に内宮と
ありしにこれハ昔者ありてあり
御鎮座傳記曰御間城入彦五十瓊殖天皇廿九歳
壬戌天照太神子遷幸但波乃子佐宮積四年奉齋
今歳止由氣之皇神天降坐天合明齋德給如天小
宮之儀志天一處雙座須于時和久産巢日神子豊
宇氣姬命神稀靈奉備御神酒太田姬傳
御鎮座本紀曰止由氣太神者水氣元神坐于變萬
化受一水之德ナハ生續命之術イキトキル故名曰御饌都神亦古

語水道曰御饌都神也又天照太神于止由氣太神
一所雙御坐之時トモ陪從謂神等奉饗御其縁也

此等と以て考れば内外両宮とも多所あり

倭姬世記曰泊瀬朝倉宮太泊瀬稚武天皇即位寸
一年丁巳冬十月倭姬命夢覺給サトヒ皇太神吾一所
耳不座マヒ波御饌モ安不聞食丹波國与謝之比沼之
魚丹原坐道主子マツ八乎止ヤ乃齋奉御饌都神止由
氣太神子我坐國欲トコヘイワ止誨覺給支

又一宮と有り康永元年備前國中大小神祇神名
之内伊勢宮有り又國中存る宮カミク清多クも条

滿之哉乃吹撥之氣化為神号級長戸邊命亦曰級
長津彦命是風神也と有り級長津彦級長戸邊二社
何れハ未審一社あり一風神所系二座と有り
豊饗憲櫛盤窓名ノ内宮の御所の神二座豊石窓神
櫛石窓神を清祓屋傳記と有り
旧事紀曰天石戸別亦名櫛石窓神亦曰神石窓神
此者御門之神

此者御門之神
此者御門之神
此者御門之神
此者御門之神
此者御門之神

天計神社北方村

式内神也所系神一座名其神未審古ハ村中ノ
祓屋有り一と金吾秀秋ノ時今ノ社地移してハ幡
宮と号す一ノ宮地を今ノ有り也言と俗ノ神言
事と云これハ何れノ古ノ神言と云今寺有り
其地今ハ幡宮の社有り一寺ハ何レノ代ノ廢レ也
祓屋ノハ幡宮ノ跡ノ所也其寺跡天計神社と
名移されたる依テハ幡宮ノ神言寺も限して
新ノノ名と考テ今置帆負神彦狹知神二神と

合名多ありて一なるも多きものありて天計ハ天量ありて
外ハ尺の所ありてハ旧事と引て考ふべし

旧事紀曰天照太神詔素戔嗚尊曰汝猶有黒心不
欲子汝相見乃入于天窟閉磐戸而幽居焉故高天
原皆闇亦葦原中國六合之内常闇不知晝夜之殊
故萬神之聲如狹蠅鳴万蚊悉發往常世國故群神
憂迷手足固厝凡厥庶事燎燭而辨矣于時八百万
神於天八湍河原神會集而議計其可奉祈謝之方
矣高皇產靈尊兒思兼神有思慮之智深謀遠慮議
天曰聚常世長鳴之鳥遍使長鳴遂聚令鳴矣中復令

紀伊忌部遠祖手置帆負神為作笠者復令彦狹知
神為作盾者復令玉作部遠祖豐球玉屋神為造玉
者復令天目一箇神為造雜刀斧及鐵鐸者復令野
槌者採五百箇野薦八十玉藏復令手置帆負彦狹
知二神以天御量謂大小量雜器類名復伐大峽小
峽之材而造瑞殿云云

國神社 下伊福村枝三門

式内神也 祭之所の神一座大國魂神大和國山邊郡

大和國中々大國魂神社と同

旧事紀曰素戔嗚尊御子大年神先娶須沼比神女

伊怒姬為妻生子五柱兒大國御魂神大和神也

日本紀曰崇神天皇五年國內多疾疫民有死亡者

且大丰矣六年百姓流離或有背叛其勢難以德治

之是以晨興夕惕請罪神祇先是天照大神和大國

魂二神並祭於天皇大殿之内然畏其神勢共住不

安故以天照大神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

立磯堅城神籬亦以日本大國魂神託淳名城入姬
命祭然淳名城入姬命髮落體瘦而不能祭七年春
二月丁丑朔辛卯詔曰昔我皇祖大啓鴻基其後聖
業逾高王風博盛不意今當朕世教有災害恐朝無
善政取咎於神祇耶蓋命神龜以極致災之所由也
於是天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以卜問
之中間神十一月丁卯命伊香色雄而以物部八十
手所作祭神之物即以大田田根子為祭大物主大
神之主又以長尾布為祭倭大國魂神之主然後下
祭他神吉焉便別祭八十萬羣神仍定大社國社及

神地神戶於是疫病始息國內漸饒五穀既成百姓
饒之

一說曰第彥命と云

日本紀曰應神天皇二十二年九月辛巳朔丙戌幸
吉備遊于小豆島庚寅亦移居於葉田葦守宮時御
友別參赴之則以其兄第子孫為膳夫而奉饗焉天
皇於是看御友別謹惶侍奉之狀而有悅情因以割
吉備國封其子等也則分川嶋縣封長子稻速別是
下道臣之始祖也次以上道縣封中子仲彥是上道
臣香屋臣之始祖也次以三野縣封第彥是三野之

始祖也復以波區藝縣御友別鴨別是笠田之始祖也即以苑縣封凡浦凝別是苑丘之始祖也即以織部縣賜兄媛是以其子孫於今在於吉倫國是其緣也

按其多々大國魂ハ上ノ記トシテ如ク瘴病始々息之國中漸々澄リ五穀年物百姓豊饒ト仰れテ諸國トモ是神ト奉ル所見トシテ又其産毛上文の如ク三野縣ニ封セテ此ノ子孫三野國造トシテ代々當部ニ居住ルル始祖ノ所産之國神ト祀ヒテ神トシテ奉ル所見トシテ又其産毛

説トモ古人モ明ク其由ニ説クモ多ク記シテ後ノ識者ト侍ルニ

石門別神社

式内神也所祭神一座既より記有るに
田代村の石神宮と式内石門別神社と
佐後氏の説あり

寛文年中改帳より石神宮は河内
神所は武甕槌命とあり

二説より内石門別神社と
猪熊の中山神社と所祭神は石
此中山神社と今石神と稱す
此を考ふるに田代村の石神宮と式内石門別神社

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

と不其説と傳はるといふ了
 尾治針名真若比女神社
 式内之神也所祭之神一尾治針名根命といふ
 旧事紀曰天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊十四
 世孫尾治針名根連頭書曰倫前國御野郡尾治針名真若比女神社
 神名帳曰尾張國愛智郡針名神社此神と同一き
 四日市村花園といふ所も是なり何時代を傳はる
 の社地も移るといふ
 清崎宮神社の説は花園といふ所も傳はるなり
 又花園神社とて毎年正月九日祭り也此祭は村中の
 老若鬼追の神事とて青葉の付たる梅木持て社の

尾治針名真若比女神社

式内之神也所祭之神一尾治針名根命といふ

旧事紀曰天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊十四

世孫尾治針名根連頭書曰倫前國御野郡尾治針名真若比女神社

神名帳曰尾張國愛智郡針名神社此神と同一き

四日市村花園といふ所も是なり何時代を傳はる

の社地も移るといふ

清崎宮神社の説は花園といふ所も傳はるなり

又花園神社とて毎年正月九日祭り也此祭は村中の

老若鬼追の神事とて青葉の付たる梅木持て社の

廻りたり記曰くといふ
初に根連の二神とありしものありんば記に屋治針名根
連に屋治針名根連の伯母真若刀婢命一住に
旧事紀曰尾綱根命妹尾綱真若刀婢命此命嫁五
百城入彦命生品陀真若王
尾治針名真若比女と訓に金記を後世をちりありあり
うひめと依各と付しものありんば神名帳に一住にれとも
屋治針名根連の真若比女命と名をありしものありんば類
諸社に多くありて住にれしものありんば又相殿にもいふものあり
金記といふことあり

津高郡

鴨神社

式内神也所祭神山城國愛宕郡加賀茂と同妻一々
よる記に依りて多し異なり
又一説に鴨別命とありしものありんば記に謂れありしものありんば
上右ハ津高郡と鴨縣といふことありんば奥多と加賀
といふこと鴨縣に鴨別命居るものありんば其子孫並に代々
住むものありしものありんば其徳を慕ひて始祖の鴨別命
とありしものありんば

日本紀曰應神天皇二十二年秋九月使自淡路轉

以幸吉備遊于小豆島庚寅亦移居於葉田葦守宮
時御友別參赴之則以其兄弟子孫為膳夫而奉饗
焉天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀而有悅情因
以割吉備國封其子等也中以波區藝縣封御友別
弟鴨別是笠臣之始祖也中是以其子孫於今在于
吉備國是其緣也

曰車紀曰笠臣國造輕島豐明朝御世元封鴨別命
八世孫笠三枚臣定賜國造

姓氏錄曰應神天皇巡幸吉備國登加佐采山之時
飄風吹放御笠天皇怪之鴨別命言神祇欲奉天皇

故其批示天皇欲知其真偽令獵其山所得甚多天
皇大悅賜名賀佐

此書言伊弉諾子小豆原廣成亦稱伊弉諾於天照太神
時御友別參起之則以其兄皇子孫為膳友而奉養
其天皇於是春神友別隨伊弉諾之欲而存祀焉
此則古傳國制於乎等也神以波區神封御友別
其神則天皇之御神也神是以其子孫於今在子
古傳言是也
曰書曰曰五世國道輕島豐明朝御也元封贈別命
八世孫三孫其定賜國道
皇天親與靈體於皇也幸吉備國靈加佐山之時
與皇妹知皇孫其皇孫則麻其皇孫神神皇孫是

宗形神社

式内神あり筑前國胸肩神社と同一所多神

三子

旧事紀曰天照太神乃以素戔嗚尊所帶三劍

化生三神振濯於天真名井亦云去刺酷然咀嚼而

吹棄氣噴狹霧之中化生三女之神十握劍化生之

神号曰瀛津島姬命亦名田心九握劍化生之神

号曰湍津島姬命八握劍化生之神号曰市杵島姬

命中天照太神勅曰其氣者是汝物也故吾所生三女

是尔兒也授素戔嗚尊則降居于葦原中國也宜降

居於筑紫國号佐島在北海道上号曰道臣貴國教
之曰奉助天孫而為天孫所祭則宗像者之所祭之
神
一云水沼君等祭神是也瀛津島姬命者其所居于
遠瀛者是田心姬命也邊津島姬命者所居于海濱
者此湍津島姬命也中津島姬命者其所居于中津
島者此市杵島姬命也
宗像社記曰所祭之神三座瀛津島姬命又名田心
姬鎮座于瀛島距陸五十餘里而突出于海中田心
姬命鎮座于此所者為防異賊故也筑前國風土記曰

宗像大臣自居荷門山天降之時以青麩玉置奧津
宮之表以八咫鏡置邊津宮之表以八坂瓊紫玉置
中津宮之表以此表成神體之形而納三宮即納隱
之因曰身形釋日本總曰先師說云胸有神體為玉
之由見風土記然則尋其由未為其神像者也
貝原好古考曰三神鎮座之說諸書不同曰事紀古
事紀二書之所記其說相同日本紀一書說市杵島
姬為在遠瀛田心姬為在中瀛湍津島姬為在海濱
然宜以旧事紀古事紀之說為正今姑從于緣起之
說

按多々當社之神乃延壽感之何れ田心姫命乃其子人
神社啓蒙曰胸肩神社或胸像在筑前國宗像郡所
祭之神一座田心姫命神代卷曰又嚙断瓊中而吹
出氣噴之中化生神号田心姫命是居于中瀛者也
又曰天照太神与素戔嗚尊誓乃取其十握劍所生
神号曰田心姫次湍津姫次市杵島姫九三女矣太
神勅曰十握劍者素戔嗚尊物也此神乃神悉是雨
兒便授之素戔嗚尊此筑紫胸肩君等所祭之神是
也

田心浦兒島郡

鴨神社

式内神也所考之神一座之何れハ涉祖之涉孫上之
別雷命也
長尾村の氏神と加多尾神社とソハ何代よりハ幅
宮と号する由定々加多尾神社の相殿ハ幅宮と号す
動清也

田心浦兒島郡
鴨神社
式内神也所考之神一座之何れハ涉祖之涉孫上之
別雷命也
長尾村の氏神と加多尾神社とソハ何代よりハ幅
宮と号する由定々加多尾神社の相殿ハ幅宮と号す
動清也

御輪

只息

田土浦神社
 式内之神也所奉之神一庄水門神速秋津日命
 又一說曰葛不發津彦命也
 日本紀一書曰伊弉諾尊子伊弉冊尊共生大八洲
 國然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而熏滿
 之哉乃吹撓之氣化為神號曰水門神
 秋津日命
 旧事紀伊弉諾伊弉冊二尊既生國竟更生神十柱
 古事紀曰次生水戶神名速秋津彦神
 次生水戶神名速秋津彦神
 古事紀曰次生水戶神名速秋津彦神

按日本書紀之神一庄水門神速秋津日命
 神社啓蒙曰胸有神社
 祭之神一庄水門神速秋津日命
 伊弉諾伊弉冊二尊既生國竟更生神十柱
 古事紀曰次生水戶神名速秋津彦神
 次生水戶神名速秋津彦神
 古事紀曰次生水戶神名速秋津彦神
 古事紀曰次生水戶神名速秋津彦神

御鎮座傳記曰瀧原宮一座皇太神遙宮也伊弉諾
伊弉册尊所生阿神名曰水戶神亦名速秋津日子
神也
旧事紀曰穗國造泊瀨朝倉朝以生江臣祖葛城襲
津彦命四世孫鬼上足尾定賜國造小
古事紀曰大倭根日子國玖琉命又娶木國造之祖
豆比古之妹山下影日賣生子建内宿祢此宿祢
子并九次葛城長江曹都毗古者玉手臣的臣生江
臣阿藝那臣等之祖也
旧事紀曰履中天皇母曰皇后磐之媛命葛城襲津

彦女也

百公卿補任曰葛城國使至武内宿祢曾孫葛城襲彦
孫玉田宿祢子也
日本紀曰應神天皇十四年弓月君自百濟未歸因
以奏之曰呂領己國之人夫百二十縣而歸化然因
新羅人之拒皆留加羅國爰遣葛城襲津彦而召弓
月之人天於加羅然經三年而襲津彦未焉十六
年八月遣平群木菟宿祢的戶田宿祢於加羅仍授
精兵詔之曰襲津彦久之不還必由新羅人拒而滯
之汝等急往之擊新羅披其道路於是木菟宿祢等

進精兵莅于新羅之境新羅王愕之服其罪乃率弓
月之人夫與襲津彦共未焉... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...
津彦... 津彦... 津彦... 津彦... 津彦...

足高備中國

同郡... 津村... 高備... 足高...

百射山神社

窪屋郡三輪村

高備... 足高...

式内神也... 多所之... 神之... 窪屋... 三輪... 村... 高備... 足高...
式内神也... 多所之... 神之... 窪屋... 三輪... 村... 高備... 足高...

ハ水神澤々命ハトリ

日本書紀神代卷一書曰至於火神軻遇突智之生...

也其母伊弉册尊見焦而化去于時伊弉諾尊恨之...

曰唯以一兒替我愛之妹者子則匍匐頭邊匍匐脚...

邊而哭泣流涕焉其淚墮而為神是即畝丘樹下所...

居之神號啼澤々命矣

古ハ百射口と云所ハ... 津彦... 高備... 足高...

のを移す神神、多村の現宮に移す事、
 又右の明現寺の相殿あり、慶長十九年、
 弘永の明現寺の相殿あり、
 又一説、多村船長寺の天神宮、
 百軒山神社といふ何處の是れを、
 日本書紀卷一書曰、至、
 百軒山神社、
 論中國

足高神社

同郡笹沖村 當時鴨方領

式内神也所多々神一座大山祇神也當時、
 字と用ひ

日本書紀神代卷一書曰、伊弉諾尊、
 為五段此各化成五山祇一則首化為大山祇、
 里民ハ當社と是言ハ幅と、
 下明神と、
 又延宝年中書上、
 移、
 神

神社。下明神と相殿とせしむり神職ハ志れは俗
下明神とハ幅と稱せしむり是等ハ幅としし所人ハ
又當時葦とて字と用ゆるハ神明秘傳書ハ是等神
社ハ葦那陸迦神と仰ぐは依て是の字とハ葦の字ハ
仰りし所人ハ

此止期北谷山五山遊一隈首山高大山山遊
日平書路軒カ卷一書曰軒葦葦神陣遊交路命
葦の原の
穴内軒の所を一新一或ハ山遊軒カ書路ハ葦の
且高軒林 同葦葦軒林 葦葦軒カ書

菅生神社 同郡生坂村之枝西坂

式内神あり所祭り神ハ産少彦名命と云ふ葦原
右ハ神村の前菅田の中ハ鶴産行りし所ハ菅生天神と
ソハ中實支年中神村の後ハ加山ハ鶴産以前ハ菅村
と神村とあり又近隣ノ民此葦を以て葦と造り
業と云其社然ハ今田地とあり菅村初名ハ氏ノ梅也
又一説ハ菅生神社ハ古馬より子信産村ノ内祐産といふ
所ハ鶴産行りし所也延喜三年十月二十三日初宮也山正及
書と云ふたり之れも菅生天神号仰り右西説何れハ
是耶と云ふ

陽成實錄曰慶元二年二月授備中國從五位下菅
生神從五位上
神代卷一書曰大己貴神之平國也行到出雲國五
十狹々之小汀而且當飲食是時海上忽有人聲乃
驚而求之都無所見頃時有一箇小男以白藪皮為
舟以鷓鴣羽為衣隨潮水以浮到大己貴神即取置
掌中而翫之則跳鬻其頰乃怪其物色遣使白於天
神于時高皇產靈尊聞之而曰吾所產兒凡有一千
五百座其中一兒最惡不順教養自指間漏墮者心
皆彼矣互愛而養之此即少彥名命是也

又天日一箇神欲と何り
旧事紀曰天照太神詔素戔嗚尊曰汝猶有黑心不
欲与汝相見乃入于天窟閉磐戶而幽居焉故高天
原皆闇亦葦原中國六合之内常闇不知晝夜之殊
故萬神之聲如狹蠅鳴万妖悉奔往常世國故群神
憂送手足罔厝凡厥庶事燎燭而辨矣于時八百万
神於天八湍河原神會集而議計其可奉祈謝之方
矣高皇產靈尊兒思兼神有思慮之智深謀遠慮議
曰聚常世長鳴之鳥遠使長鳴遂聚令鳴矣畧復令
天日一箇神為造雜刀斧及鐵鐸者

神名秘傳書曰菅生神社者菅生朝臣也
姓氏錄曰菅生朝臣者大中臣同祖津連魂命三世
孫天兒屋根命後也云云

新考の秘傳書と傳記りとせんか

又河内國菅生天神と仰（？）も（？）前（？）右平記と後（？）
下は記と物述（？）と云ふ（？）
前々太平記卷十三菅丞相降臨修下曰永和十一年三月
五日冬議菅原是善卿（？）私籬庭遣水上上巖肩
二年ノ程五歳ハカリナル（？）卯結タル童子一人忽然ト来リ立

玉（？）是善卿御覽（？）不思議ト思セトモ少モ不駭ヲコトハソモ
何因ヨリ来リ玉ヘルヤ名ヲハ何トカ申ソト尋玉ハ此童子袖
搔合テ曰我ハ父モナク母モナシ公文章ノ家ナレハ以哀憐蒙撫
育風月ノ道ヲ學ハント欲ス成長ノ後事朝臣爵如心ナラバ
真ノ親ノ如シテ反哺ノ報ヲナシ奉ラニ仰願ハ被垂慈愍ヲ
鞠養扶助シ玉ハシカト謹テ歎キ宣ハ是善卿心ノ裏是
紛（？）ナキ天童ナラレ我文學ノ道ヲ扶ケ家ヲ興スノ神ナル
ハシト一議ニモ及ハス抱キトリテヨクコソ来リ玉ヒタ望任テ
家風ヲ傳ヘ成長ノ後朝家ニ進メ塩梅ノ臣トナスヘキ也
先螢雪ノ功ヲ積ニ學窓ニ眼ヲ曝ス暇猶六藝ヲモ心ニ

拂テ修得シ玉ヘトテ世上ニハ深ク藏シテ育ク真子也ハ
後日披露シ依器量叡聞ニ達ス可シト思ヒ時々ニ其才
徳ヲ試玉フニ聞一知十ノ發明ナルヲ往代未傳聞當世
比類ナカリケレハ父ノ卿誠ノ子ヨリモ猶哀憐深クゾ
思シケル

河内国菅生天神ノ記云永和三十三年三月三日此所ノ菅生
ノ池邊ニ年ノ程五歳ハカリナル童子一人忽然トシテ北面ノ
立玉ヲ野人村翁之ヲ見テ凡人ナラヌ御形勢衛護乳母モ
ナク唯獨威儀嚴重ニシテラワシマスイカナル兒ニテ御坐
スソト謹テ尋奉レハ彼兒答テ曰予ハ此国ノ者ニヤラス父

モナク母モナシ都ニ参議菅原是善卿ト云人アリ彼ニ詣テ
其人ヲ父ト頼テ学ヒ成長ノ後ハ君ニ事ハ政道輔佐ノ臣
トモナラハ今日汝オカ勞ヲ酬フヘシ早ク帝都ニ送リケヨト
仰ラレケレハ里人トモ事ノ子細ハ知ラ子トモ先御慥懃存
シ其幼キ御身ニ物宣フ體更ニ成人ニ異ナラス又看御
ノ衣袴柄笏ノ雜ヒ偏ニ神童ト見奉レハ恭敬尊重ニ
侍リ菅ノ清浄ナルヲ撰テ圓座ヲ造リ居奉リ先供御ヲ
調進セシト云童子振首テ我食ハ汝等カ調儀ニ及難
シ唯清潔ナル水ヲ飲ヘヨ若クハ末枝ニアル果ヲ服用スヘキ
ナリ只願クハ片時モ早ク都ニ送り届クヘシ菅生下書

ル郷ヲ各ノ菅原ノ家ニ宿ルヘキ^{キヤシ}兆ニ應スル^{オカシ}懐カ^カ假ニ此
所ニ来ルノミト仰ラレシカハ里人俄ニ黒木ノ御輿ヲ調
テ農夫野人等沐浴シテ彼ノ兒ヲ乗セ奉リ十又半
守護シ參ラセ飛カ如クニ都ヲサシテ登リタリケルカ不思
議ヤナ此駕輿下^下兵日来ハ都ヲ雲井遙ニ覺シカ二時
ハカリニ上洛シ刺少モ疲ル事ナク又食念モナカリシ奇
妙トモ餘ア少斯テ是善卿ノ御館ヲ里人トモハツコトモシ
ラス惑ヒアリキシニ此御兒尔尔ノ所ト教玉ヒ門前^ニシテ
輿ヨリ下リ送ル者共ニ向ヒテ曰今ヲヨリ後十箇年^十過ナ
我ハ必ス官祿ヲ得ン其時汝等ヲ呼出シテ今日ノ思ヲ

報フヘシソレ迄此事人ニ語ルナイサ、ラハトテ留リ玉ヘハ
里人ハ御餘波ハ惜ケレトモ萬仰ニ隨ヒテ是ヨリ御暇
申ツ皆々河内へ歸リケリ其後里人此事ヲ深ク秘シ
ナカラ京へノ便ニ附テハ餘所ナカラ此御兒ノ御ヨスカ
ヲ聞參ラスルニ世上ノ風聞只人ナラス一ヲ聞テハ十ヲ倍
ノ御器量タルノ由隱ナカリシカハ里人共乍恐是ヲ悦ヒ
テ月日ヲ教ヘ待處ニ過マタス十年ヲ經テ三月五日ニ都
ヨリ使ヲ下サレテ彼ノ十人ヲ召上セラレ一人ニ系十俵青
銅百匹ツ下サレテ昔ノ勞ヲ報シ玉ヒ且又汝等カ里ノ
土神ハイカナル神トカ知ルヤラント問セ玉ヘハ郷人トモ

愚蒙ナル故ニ其名ヲハ知候ハス唯昔ヨリ菅生明神トノミ
申シ風俗崇^ト參ラセ候ト答フ菅童歩諾セ玉ヒサラハ朝
延將未神社ノ撰アラン時是ヲモ可加入也毎年ノ神事
無断絶可執行今年ヨリハ予力産神モ此神ト崇メ
ナントテ祭礼ノ日ハ京ヨリ使ヲ下サレテ種々ノ幣物ヲ
捧ケラルレヨリ神事年々ニ恒例ト成テ無懈怠
コソ延喜式神名帳ニ菅生神社ト書載ラル北野ノ聖
廟建テ後ハ直ニ其社ヲ天満宮ト奉崇テ今ノ世マテ菅生
ノ天神トハ申スナリ

古郡神社

賀夜郡模谷村

式内神也所祭ノ神一庭神名不^レ知
社司の説ニ菑村十二社権現の社地ニ古郡神社の社趾
のニ致^レテ社ありと云ふ
又或人の説ニ菑村ニ金比羅とてありたり
讚列金比羅とハ別神あり所祭大己貴命あり
此神也

神名

古郡神社

古郡神社の社地ニ古郡神社の社趾
のニ致^レテ社ありと云ふ
又或人の説ニ菑村ニ金比羅とてありたり
讚列金比羅とハ別神あり所祭大己貴命あり
此神也

神神社

下道郡下原村枝八代

式内神也所祭之神一柱大己貴尊あり大和國城上郡三輪社と同一き也

香しく邑久郡美和神社と処に記す如く是は古く昔時皇と三輪神社と同一代の氏神あり別の神は有りて則神神社あり文字の加己皇たるも有りあり

大和郡下原村枝八代

古蹟軒坊

賢身酒軒谷林

石疊神社

同郡下原村枝上

式内神也神躰不知と實支年中改帳有り
新に考ふる當村の東に大河有り其河の多し又大なる
其名あり古く凡三平丈も有りあり皇氏皇と疊と
此岩平地より石と疊と出るやうなれハ石疊と名付
るらん如岩山の腰より山の絶頂より小祠有り山の
麓に平地有り二柱と建つる詣の藁ハ此所にて
拝する如く石と神躰と一と祭りしやうなれハ此所の
土地の神と一社ハ古くこの所を其の所と後世少祠と
建てるるものありけ例多しと有り絶頂に昔あり

何の終り傳く事ありし神名を改帳し何の
神名秘傳書より奇稲田姫と何の
神代卷曰素戔嗚尊自天而降於出雲國簸之川
上時聞川上有啼哭之聲故尋聲覓往者有一老公
与老婆中間置一少女撫而哭之素戔嗚尊問曰汝
等誰也何為哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳
我妻號手摩乳此童女是吾兒也號奇稲田姫所以
哭者往時吾兒有八箇少女每年為八歧大地所吞
今此少童且臨被吞無由脫免故以哀傷素戔嗚尊
勅曰若然者汝當以女奉吾耶對曰應勅奉矣畧乃

相与遭合而生兒大己貴神

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '相与遭合' and '而生兒大己貴神'.

麻佐岐神社

同郡秦下村

式内神也所祭神一柱正鹿山津見命と云

古田村又山阿麻佐岐山と云は山の上の神殿の柱石玉

頃鳥指等々云々

旧事紀曰伊弉諾尊遂斬軻遇突智頸為三段亦為

五段亦為八段中八段各化為八山祇一則首化為

大山祇亦名正麻山陣見神

里人の説は早りの時ハ山の上を登りて祈雨を乞ひ

て云ふ云ふと云ふ事ありと云ふ

けり云ふ山の名高き名所と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ

隆轉

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ

日向本村山々城之上月伊豆守光滿等の先田
書付系書簡又ハ荒手ノ城之川西強三郎之系
等ノ書簡干今 相官ハ橋氏の許ニ藏書書簡
の何々多ハ古川坊と何リハ古川坊山伏ノ今ノ
祠友の先祖也 實承の比還俗トシテ祠友トアリ
右免田の書付の内松書トシテ後の考ヘテ証ス

橋本十三社諸祭事
三月一日ハ幡言祭一辰目田サコ
三月一日妙見ノ祭一辰妙見鹿
三月一日清前祭一辰畠

三月七日物堂一辰ノ田代橋本
三月六日ひめノ祭一辰ノ田代
三月五日天神ノ祭一辰ノ田代
三月五日壬子祭一辰畠田九月九日
三月十日龍王祭一辰畠
三月十日マサキの祭一辰カミノ畠
八月十日清本祭一辰畠
九月九日かの志ら祭一辰石河
十月十日石河ノ祭一辰中田
三月十三日茶神祭一辰

十月廿五日 加々大明神 祭 多反畠

十二月廿日 女社 奉くも 祭 何ありのん 田古代 中山 荒

神 祭 奉 公 方 たり

六月廿日 百文
十月廿日 百文

天正三年九月廿日 祭 奉 山 荒

祭 奉 山 荒

祭 奉 山 荒

祭 奉 山 荒

祭 奉 山 荒

祭 奉 山 荒



